

失題

失題

蕭	獨	鬢	秋	居	在	覓	雁
然	會	影	聲	官	獄	銷	過
酒	平	與	隨	失	知	蟋	南
數	生	霜	雨	道	天	蟀	窻
斟	事	侵	到	心	意	吟	晚

雁南窓を過ぐる晚
魂は蟋蟀の吟に銷す
獄に在っては天意を知り
官に居ては道心を失う
秋声雨に随つて到り
鬢影霜と与に侵す
独り平生の事と会り
蕭然として酒數斟む

（口語訳）夕暮れ、南側の窓から空を仰ぐと雁が飛んで行く。窓下の草むらではこおろぎがしきりに鳴いて魂が消え入るような感じである。獄中にいた時は、天の心が分かって自分の心もその心に合致したように悟ったが、官吏になつてからは、良心を失つて天の心に背いたような気がする。秋のけはいは一雨毎に加わり、鏡にうつる鬢の毛は霜と共に益々白くなつてきた。これらのことは人生当たり前のことだとさとして、ひとりひそかに慰め、しよんぼりとしきりに酒をくみ、杯を重ねることである。

閑居偶成

閑居偶成

幽居向晚嫩涼生
塵外早知風物清
昨日苛雲何處去
梧桐葉上已秋聲

幽居晩に向かつて嫩涼生じ
塵外早くも知る風物の清きを
昨日の苛雲何れの処にか去る
梧桐葉上已に秋声

（口語訳）物静かなすまいでは晩方になつて幾らか涼しくなつてきた。浮世を離れているので、都会よりも早く季節毎の景色の清らかさが分かり、昨日までのきびしい夏の雲はどこへ去つたのか、桐の葉の上を吹き過ぎる風には早や秋の声がかきこえる。